

【敬語法】 現代では、一般に会話以外に敬語は使われないが、古文では、地の文(会話文以外の文)でも敬語が用いられる。それは、敬語の仕組みが現代文と異なっているからである。

敬語の種類 敬語は、誰に対する敬意を表すかによって三種類に分けられる。

- ① **尊敬語** 語り手(書き手・作者)が、話題の中の動作する人(動作の主体)に対する敬意を表す。
- ② **謙讓語** 語り手(書き手・作者)が、話題の中の動作を受ける人(動作の受け手)に対する敬意を表す。
- ③ **丁寧語** 語り手(書き手・作者)が、聞き手(読み手)に対する敬意を表す。

〜敬語のポイント〜

- ・ ① **誰の**
- ・ ② **誰に対する敬意なのか?**
- ・ ① **誰の敬意なのか?** ↓ 基本的にはすべて**語り手の敬意**
- ・ ② **誰に対する敬意なのか?**

S (H) || 語り手 → **動作をする人(主語)** への敬意

K (H) || 語り手 → **動作の受け手(目的語、補語)** への敬意

T (H) || 語り手 → **聞き手(読み手)** への敬意

※尊敬語 || S、謙讓語 || K、丁寧語 || T、補助動詞 || H

・ 敬語を訳すコツ

S (H) || **主語**をイメージする

K (H) || **補語・目的語**をイメージする

・ 最高敬語(せ給ふ、させ給ふ、仰せらるなど)は、**S S H**または**S S**

尊敬(S)の助動詞+尊敬(S)の補助動詞(H)

尊敬(S)の動詞+尊敬(S)の助動詞

※帝(あるいは后)の動作に対して語り手の最高の敬意を表すもの

・ 絶対敬語(奏す、啓す) ↓ 「奏す」は「天皇・上皇」に、「啓す」は「后・皇太子」に

・ 二方面敬語(謙讓+尊敬)のコツ

主語と補語・目的語を同時にイメージする

例 K H S H

すかし申し給ふ。

訳 Aが Bを だまし申し上げなさる。

Aが Bを (一) (お) (お) 申し上げなさる

※語り手から、AとBの双方に敬意を表している

〜尊敬の「給ふ」「と謙讓の「給ふ」〜

- ① 活用の違いは?
- ② どのような言葉につくのか?
- ③ どのような場面で使われるのか?
- ④ 誰の誰に対する敬意なのか?

① 尊敬「お与えになる・なさる」の「給ふ」(ハ行四段活用) は ひ ぶ ぶ ぶ へ

謙讓「いとおまかせ・まかせ」の「給ふ」(ハ行下二段) は ひ ぶ ぶ ぶ へ

② 謙讓の「給ふ」「は」見る「聞く」「思ふ」「知る」などの知覚動詞につく。

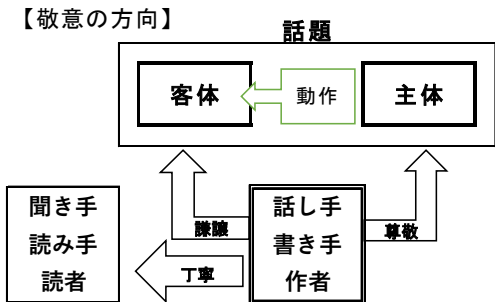
③ 謙讓の「給ふ」は主に会話文・手紙文で用いられる。

④ 話し手(作者)から聞き手(読者)への敬意(丁寧語に近い)

※「給ふ」の語源は「魂合(たまあひ) ↓ たまひ

「下の求める気持ちと上の与える気持ち一致する

「たまひ」の受動態 ↓ たまへ ↓ 謙讓の「給ふ」「食ふ」「食べる」の語源?



【二次の古文を読んで後の問いに答えよ。

名 動(ハ四・「言ふ」)のク語法 名 格助(体修)名 格助(対象)動(謙讓・連用)

俊恵 いはく、 「五条三位入道 の もとに (Aまつで

敬意の方向俊恵↓俊成

助動(完了・連用)助動(過去・連体)名 格助(時間) 〈接頭〉名 格助(体修)名 格助(範囲)係助(区別)たり たり ことばに、 『(B御詠) の 中 に は、

代名 格助(対象)係助(疑問)動(ラ下二・連用)助動(存続・終止)格助(引用)動(尊敬・連体)名 (こいづれを) か すぐれ たり と おぼす。 よそ

俊恵↓俊成

格助(体修)名 形動(ナリ・連用)動(マ下二・連用)補助(丁寧・已然)接助(逆・確定)代名 格助(対象)の 人 さまさまに (D定め) 侍れ 俊恵↓俊成 ど、 それを

係助(区別)動(ワ上二・連用)補助(丁寧・連体)助動(適当・未然)助動(打消・終止)形(シク・連用)は (E用ゐ) 侍る 俊恵↓俊成 べから す。 (Fまよしく

動(謙讓・未然)助動(意志・終止)格助(引用)動(ハ四・終止)格助(引用)動(謙讓・連用)助動(過去・已然)承ら ん と 思ふ。』 と (G聞こえ) しか

俊恵↓俊成

接助(順・確定) ば、

俊恵↓俊成

名 動(ラ四・已然)接助(順・確定)名 格助(体修)名 名 格助(対象)動(マ四・連用)接助 名 『(Hタ)され ば) 野辺 の 秋風 身に しみ て うづら

主な登場人物

- ・俊恵(鴨長明の師)
- ・五条三位入道(藤原俊成)

《逐語訳》

俊恵が言うには、「五条三位入道「藤原俊成」のところに(A参上したついでに)、(Bおよび)になった和歌)の中では、(Cどの歌をすぐれているとお思いですか)。他の人があれこれと(D議論してはいますが)、他人の言うことを(E採用するのはよくありません)。(Fはつきりとお聞きしようと思う。』と(G申し上げたところ)、

『(Hタ方になると)、野辺の秋風が身にしみ入るように感じられて、うづらが(寂しく)(I鳴くようだ)、この深草の里では。

問一 傍線部の動詞(敬語は網掛け 例 給ひ、形容詞、形容動詞、および四角で囲んだ助動詞)について、文法的に説明せよ。本文の右側に書け。略記でもよい。(例 断定「なり」止)

問二 逐語訳の空欄A～Iに最適な逐語訳を入れよ。

問三 次の文章は「タされば」の歌の修辞技巧について説明したものである。空欄①～⑤に最適な語を入れよ。

和歌の結句が①「深草の里」で終わっている点から、②体言止め」という修辞技巧が使われているのが分かる。さらにこの和歌は、典拠のしっかりした古歌を踏まえて新しく作歌する③本歌取り」の技法が用いられている。この歌が典拠としているのは、④『伊勢物語』の第二百二十三段の「野とならばうづらとなりて鳴きをらむかりにだにやは君は来ざらむ」(あなたがいらっしやらなくてこの深草の里が荒れ野となったら、私はうづらになりて「憂」う、辛)うづら)と鳴いて年を過してしまっているでしょう。そうすればあなたは狩りにでも、仮にちよっといらっしやらないでしょうか、いやいらっしやるでしょう)という歌である。なお、それに関連して「秋風」と「飽き」「うづら」と「憂・辛」を⑤掛詞」とする説もある。

【2】次の古文を読んで後の問いに答えよ。

代名 格助(対象) 係助(強意) 名 格助(対象) 動(ラ四・連用) 接助 係助(区別) 名 格助(引用)  
これを なん、 身に とり て は (Aおもて歌)と

動(ハ四・連用) 補助(謙讓・連体) 格助(引用) 動(ハ四・未然) 助動(尊敬・連用) 助動(過去・連体) 接助 名  
(B思ひ 給ふる)。(C言は れ (Dあまねく 申し を、 俊恵

敬意の方向俊成↓俊恵

副 動(ハ四・言ふ)のク語法 名 格助(場所) 形(ク・連用) 名 格助(主格) 動(謙讓・連用)  
また いはく、 『世に (Dあまねく 人の 申し

俊恵↓俊成

補助(丁寧・連体) 係助(提示)  
侍る) は、

俊恵↓俊成

名 格助(資格) 名 格助(体修) 名 格助(対象) 動(タ下二・連用) 接助 名 動(力変・連用)  
面影に (E花の 姿)を 先立て て(F幾重 越え来

助動(完了・終止) 名 格助(体修) 名  
助 峰の 白雲

これを (Gすぐれ たる やうに 申し 侍る)

代名 格助(対象) 動(ラ下二・連用) 助動(存続・連体) 助動(婉曲・連用) 動(謙讓・連用) 補助(丁寧・連体)  
これを (Gすぐれ たる やうに 申し 侍る)

俊恵↓俊成

俊恵↓俊成

係助(提示) 副 格助(引用) 動(謙讓・已然) 接助(順・確定)  
は、 しかこ。』と (H聞こゆれ ば、

俊恵↓俊成

《逐語訳》

この歌を、自分にとっては(A代表的な歌)と(B存じます)』と(C言われたが)、俊恵がまた  
言うことには、『世間に(D広く人が申します)には、

目の前に(E満開の桜の花)を思い浮かべて、それを求めて(Fいくつの峰を越えて来たこと  
か)。それは実は遠山にかかる白雲だったのだが。

この歌を(Gすぐれているように申します)は、どうでしょうか。』と(H申し上げると)、

問四 傍線部の動詞(敬語は網掛け 例 給ひ、形容詞、形容動詞、および四角で囲んだ助動詞)について、文法的  
に説明せよ。本文の右側に書け。略記でもよい。(例 断定「なり」止)

問五 逐語訳の空欄A～Hに最適な逐語訳を入れよ。

問六 「身」(8行)とは誰のことか。

答 五条三位入道(俊成)。

問七 「面影に花の姿を先立てて」(10行)とはどうすることか。三十文字以内で説明せよ。

答 桜の咲くさまを思い浮かべて、それを期待して歩くこと。

【二】次の古文を読んで後の問いに答えよ。

副 名 格助(場所) 係助(区別)

『(Aいさ)、(Bよそ)に は

副 係助(疑問) 動(マ下二・連用) 補助(丁寧・連体) 助動(現在推量・連体) 動(ラ四・連用) 補助(謙讓・未然)  
さも や 定め 侍る 敬意の方向 俊成↓俊恵 らん、 (C知り) 給へ 俊成↓俊恵

助動(打消・終止) 副 代名 係助(区別) 名 格助(体修) 名 格助(基準) 係助(強調) 動(ハ下二・終止)  
す。 なほ みづからは、 先の 歌に は (D言ひ比ぶ)

助動(可能・未然) 助動(打消・終止) 格助(引用) 係助(強意) 動(丁寧・連用) 助動(過去・連体) 格助(引用)  
べから す。』 と (Eぞ) 侍り 俊恵↓作者 「。』 と

動(ラ四・連用) 接助 代名 格助(対象) 副 動(謙讓・連用) 助動(過去・連体) 係助(提示) 代名  
語り て、これを うさうちに 申し 俊恵↓作者 』 は、か

格助(体修) 名 係助(提示) 名 格助(対象) 動(マ四・連用) 接助 格助(引用) 動(ハ四・連体) 名 格助(体修)  
の 歌は、 『身に じみ して』 と いふ (F腰) の

名 格助(主格) 形(シク・連用・ウ音便) 形動(ナリ・連用) 動(ヤ下二・連体) 助動(断定・終止)  
句) の G (いみじう) 無念に おぼゆる なり。

### 《逐語訳》

『(A)さあどうでしょうか、(B)ほかではそのようにも評定しているでしょうか。私は(C)存じ  
ません。やはり自分では、先の歌には(D)比較することはできません。』と(E)いうことでした。』  
と語って、これについて内密に(私)に(私)に「あ、この歌は、『身にしてみても』という(F)  
第三句)が(G)たいそう残念に思われるのだ。』

問八 傍線部の動詞(敬語は網掛け 例 給ふ)、形容詞、形容動詞、および四角で囲んだ助動詞について、文法的  
に説明せよ。本文の右側に書け。略記でもよい。(例 断定「なり」止)

問九 逐語訳の空欄A、Gに最適な逐語訳を入れよ。

問十 「よそ」(11行)と対照的な語を抜き出せ。

答 「みづから」(12行)

問十一 「さ」(12行)は、どのような内容をさすか。

答 「面影に」の歌を俊成の代表作とすること。

問十二 「先の歌」(12行)とはどの歌か。

答 「タされば」の歌。

問十三 「かの歌」(13行)とはどの歌か。

答 「タされば」の歌。

【四】次の古文を読んで後の問いに答えよ。

代名 副助(程度)

これほど

格助(結果) 動(ラ四・連用) 助動(完了・連体) 名 係助(区別) 名 格助(対象) 動(サ四・連用) 接助 副  
に なり ぬ 歌は、 (A景気)を 言ひ流し て、 ただ

形動(ナリ・連用) 名 格助(対象) 動(マ四・連用) 助動(過去推量・終止) 終助(念押し) 格助(引用)  
そらそらに (B身)に しみ けん かし と

思は せ たる こそ (心)こころも (D優)に  
動(ハ四・未然) 助動(使役・連用) 助動(完了・連体) 係助(強意) 形(ク・連用) 係助(並列) 形動(ナリ・連用)

係助(並列) 補助(丁寧・已然) 形(シク・連用・ウ音便) 動(力四・連用) 接助 名 格助(体修) 名 格助(結果)  
も 待れ。 (E)いま言ひもてゆき て、 (F歌)の 詮と

敬意の方向 俊恵↓作者  
動(サ変・終止) 助動(当然・連体) 名 格助(対象) 副 動(サ四・連用) 助動(存続・已然) 接助(順・確定)  
(G)す えき ふしき、 さはと (H言ひ表し) たれ は、

形動(ナリ・連用) 名 形(ク・連用) 動(ラ四・連用) 助動(完了・連体) 格助(内容) 代名 格助(体修) 名  
(I)むげに こと 浅く なり ぬれ。 とて、 その こと

格助(順序) 代名 格助(体修) 名 格助(体修) 名 格助(範囲) 係助(区別)  
に、 「わ が 歌 の 中 に は、

これほど(の境地)になった歌は、(A具体的な景色や詩的雰囲気)をさらりとよみ表して、ただ言葉にせずともさぞ(B身にしみたらうよ)と思わせたのこそが、(C奥ゆかしく)も(D優美でもあります)。しかし、この歌は、(E上手に)よんでいって、(F歌の最も大事なところ)と(Gするはずの箇所)を、「身にしてみても」あっさりとして(H言葉で表している)ので、(Iひどく趣が浅くなってしまったよ)。「と言って、そのついでに、「私の歌の中では、

《逐語訳》

問十四 傍線部の動詞(敬語は網掛け 例 給ふ)、形容詞、形容動詞、および四角で囲んだ助動詞について、文法的に説明せよ。本文の右側に書け。略記でもよい。(例 断定「なり」止)

問十五 逐語訳の空欄A～Iに最適な逐語訳を入れよ。

問十六 俊恵は、どのような歌をすぐれた歌と考えているのか。

【答】具体的な景色や詩的雰囲気をさらりとよみ表して、歌の最も大事なところを読者に感じ取らせる歌。

問十七 俊恵は、どのような歌を趣が浅い歌と考えているのか。

【答】言葉ではつきり表現しすぎて、歌の最も大事なところを説明してしまった歌。

【五】次の古文を読んで後の問いに答えよ。

〈接頭〉名 格助(体修) 名 〈接頭〉動(ラ四・連用) 名 動(ラ四・已然) 接助(順・確定) 名 格助(体修)

み吉野 の 山 かき置り (A雪) 降れ ば 麓 の

名 係助(区別) 〈接頭〉動(ラ下二・連用) 接助(反復)

里 は うちしべれ っし

代名 格助(対象) 係助(強意) 代名 格助(体修) 名 格助(結果) 動(サ変・未然) 助動(意志・終止)  
これを なん、(Bか) の たぐひに せ

格助(引用) 動(ハ四・連用・ウ音便) 補助(謙讓・連体) 副 名 格助(体修) 名 格助(時間) 形(ク・連用)  
と (C思う) 給ふる。 もし世の 末に、 (Dおぼつかなく

敬意の方向 俊恵↓作者

動(ハ四・連体) 名 係助(強意) 動(ラ変・未然) 接助(順・仮定) 副 係助(強意) 動(ハ四・連用)  
言ふ 人も あら ば、 『Eかくこそ 言ひ

助動(過去・已然) 格助(引用) 動(ラ四・連用) 補助(尊敬・命令) 格助(引用) 係助(強意)  
しか。』 と (F語り) 給へ。』 と ぞ。

俊恵↓作者

### 《逐語訳》

吉野山が一面に曇って(A雪が降ると)、麓の村里では冷たい時雨が降り過ぎ降り過ぎしてい  
くよ。

この歌を、(B代表作の類にしよう)と(C思います)。もし私の死んだあとで、(D代表歌がわか  
らないと言う人もあったら)、『Eこのように言ったよ。』と(Fお話しください)。」と話した。  
問十八 傍線部の動詞(敬語は網掛け 例 給ふ)、形容詞、形容動詞、および四角で囲んだ助動詞について、文法  
的に説明せよ。本文の右側に書け。略記でもよい。(例 断定「なり」止)

問十九 逐語訳の空欄A〜Fに最適な逐語訳を入れよ。

問二十 「かのたぐひ」(6行)は何をさすか。

答「おもて歌」(代表作)

【六】要点の整理 次の空欄に適語を入れて、内容を整理せよ。

●次の空欄に適語を入れて、内容を整理せよ。

### 第一段落 初め〜一七八・13

俊成の代表作に関する俊恵の質疑

俊恵が俊成に「      」を尋ねたところ、俊成は「      」

「      」の歌をあげた。俊恵は「      」

「      」の歌のほ

うが「      」が高いがと尋ねると、俊成は、ほかではそのように決めているのでしょつが、「      」

「      」にならないぐらいよいといつことであつた。

### 第二段落 一七八・13〜一七九・3

俊成自賛歌への俊恵の批判

しかし、俊恵はあの「      」

「      」という第三句が惜しまれると言つ。これほどの秀歌は、

「      」描写で心を伝えればよいのに。」

「      」的な露骨に。」

「      」で表しているから、

ひどく。」

### 第三段落 一七九・3〜終わり

俊恵の代表作

俊恵の歌の中では、「      」

「      」の歌がよいと思つているので、死後に。」

う。」

「      」していたと伝えなさいと言つた。

### 要点の整理

A代表歌(代表作) イタされば ウ面影に

工世評(評判) オタされば カ比較(問題)

キタされば ク身にしみて ケ客観

コ肝心(大事) サ主観 シ言葉 ス趣(底)

セみ吉野の ソ代表歌(代表作) タ自賛